

2. 事業の目的と概要	
(1) 上位目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4つのヘルプ・センターでの保健衛生、教育関連活動、技術トレーニングなどが継続的に実施され、家事使用人として働く少女たちの生活環境が改善される。</li> <li>・ 家事使用人として働く少女たちの雇用主とその家族や地域住民に本活動への理解が深まる。</li> <li>・ バングラデシュ社会に本活動および家事使用人として働く少女たちの現状について、メディアや同様の活動を実施する NGO・国際機関との連携を通じて広く伝わる</li> </ul>
(2) 事業の必要性 (背景)	<p>シャプラニールは、家事使用人として働く少女たちの実態調査を 2005 年に実施した。その結果、バングラデシュの首都ダッカでは多くの少女たちが非常に厳しい状況で働かされていることが分かった。密室に近い家庭内で非常に安い賃金または無給での長時間労働を強いられ、時間や移動の自由もなく、教育を受ける機会も奪われており、雇い主による性的なものを含む様々な暴力の被害に遭うケースも多くあった。そこで試験的な活動を行った上で 2006 年 6 月からパートナー団体 Phulki とともに、家事使用人として働く少女への支援活動を本格的に開始。2010 年 7 月からはバングラデシュ第二の都市チッタゴンにおいても地元 NGO とともに、家事使用人として働く少女および雇用主を対象とした活動、および少女たちの出身地であるチッタゴン周辺の農村部における少女の家族や地域住民を対象とした活動を開始した。</p>
(3) 事業内容	<p>家事使用人として働く少女たちが暴力や性的虐待、搾取、工作中的事故から守られ、心身ともに健康に成長し、自らよりよい将来を描けるようになる環境を創り出すことを目的に、少女たちへの活動、雇用主や地域住民への活動を継続するとともに、バングラデシュ社会への働きかけや国際機関や同様の活動を実施する NGO との共同イベントなども実施していく。具体的な活動内容は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ インフォーマル教育        簡単な読み書き計算、保健衛生について学ぶ機会を提供する。        対象者：少女 20 名×4 つのセンター        目的：読み書き計算、生活に関する保健衛生の知識を習得する        会場：各センター 講師：スタッフ</li> <li>・ 衛生教育        身の回りを清潔に保ち病気を防ぐための衛生教育を実施する。また怪我などに対する簡単な応急処置が可能な救急箱を各センターに設置する。</li> <li>・ スキルアップトレーニング        少女たちへアイロンかけや刺しゅう、料理などの研修を実施する。またミシンを使用した縫製トレーニングも実施する。本プログラムでは少女たちの技術の向上は勿論、技術向上によって雇用主との関係が良くなっていくことを目的としている。</li> </ul>

1) アイロンかけ研修

対象者：少女 20 名×4 つのセンター

目的：少女たちがこれまで独自で行ってきたアイロンがけについて正しい方法を習得する

会場：各センター 講師：スタッフ

2) 刺しゅう研修

対象者：少女 20 名×4 つのセンター

目的：少女たちが刺しゅうについて学ぶ

会場：各センター 講師：スタッフ

3) 料理研修

対象者：少女 20 名×4 つのセンター

目的：少女たちが料理を学ぶと同時に雇用主との交流も図る

会場：各センター 講師：スタッフ&雇い主の代表

・雇用主および地域住民等への啓蒙活動

子どもの権利ワークショップの実施や本事業の成果や問題解決を話し合うミーティングを実施する。また今後、雇用主や地域住民がセンターの運営を自分たちで担っていけるよう、センター運営への参加を進めていく。

1) 子どもの権利ワークショップ

対象者：雇用主および地域住民 50 名×4 つのセンター

目的：子どもの権利について学ぶことで、少女たちへの対応が子どもの権利に基づいた対応となる

会場：各センター 講師：スタッフ

2) 活動報告会

対象者：雇用主および地域住民 50 名×4 つのセンター

目的：本事業を活動の成果を少女たちが発表し、活動の重要性を雇用主および地域住民が理解する。

会場：各センター

・マスメディアとのワークショップの開催

本活動や家事使用人として働く少女たちの現状を伝えるマスメディアとのワークショップを開催。少女たち自らの声や雇用主からのメッセージをマスメディアを通じて広くバングラデシュ社会に訴える。

対象者：ダッカ市内の新聞、テレビ、ラジオの記者

目的：本事業の成果および少女たちが抱える課題を記者が理解し、マスコミに取り上げてもらうことで市民社会に訴える。

会場：各センター

・NGO および国際機関とのワークショップの開催

本活動と同様の活動を実施している NGO や国際機関とのワークショップを開催し、ワークショップそのもののプレスリリースを通じて活動や少女たちの現状を広く伝えるとともに、今後 NGO や国際機関との合同キャンペーンなどの可能性を探る。

対象者：NGO や国際機関のスタッフ

目的：同様の活動を実施する団体がそれぞれの活動の成果と共通の課題

	<p>を共有することで、合同キャンペーンなど今後の可能性を探る。 会場：ダッカ市内のミーティング会場</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>本事業は、パートナー団体 Phulki と 2008 年 4 月から 2011 年 3 月までの 3 年間の事業実施契約を結んで実施してきた。2011 年 4 月以降も複数年の事業実施契約を結び、家事使用人として働く少女支援を継続して実施していくほか、バングラデシュ第 2 の都市チッタゴンで実施している同趣旨のプロジェクトを含め、マスメディアや同様の活動を実施する NGO や国際機関への働きかけを実施することで、バングラデシュ社会全体に本事業の意義と使用人として働く少女に関する問題を共有し、最終的にバングラデシュ社会からこうした少女たちが生み出されないようになることを目的に掲げている。なお、2015 年度以降は働く少女の生活改善にむけた活動を地域住民が担っていけるよう、地域住民に積極的な関わりを促していく予定。</p>
<p>(5) 期待される効果と成果を計る指標</p>	<p>裨益者数  家事使用人として働く少女 200 名  少女たちの雇い主とその家族 約 800 名  少女たちの家族 約 800 名  少女たちが働く地域の住民 約 3,500 名  (そのほか、マスメディアや NGO および国際機関とのワークショップ開催を通じ、首都ダッカで暮らす市民社会)</p> <p>期待される効果  インフォーマル教育、スキルアップ研修：働く少女たちが新しい技術や知識を学び身につけた結果、生活環境が改善される</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な読み書きや計算ができるようになる (40 人)</li> <li>・センターに通う少女の 1/3 以上が、センターに通う前に比べて病気になる頻度が減ったと感じる</li> <li>・センターに通う少女の 1/3 以上が、新しく獲得したスキルによって給与が増加する、または追加的な収入を得られるようになる。</li> </ul> <p>啓蒙活動：雇用主が少女たちに対する認識を改めることで、彼女らに対する暴力および不当な扱いが減る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センターに来る少女たちの半数以上が、雇用主の態度が良いほうに変化したと感じる</li> </ul> <p>ワークショップ開催：雇用主やダッカ市民が、家事使用人として働く少女たちの状況を認識し、家事使用人を生み出さないようにするための社会環境が醸成される</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動がバングラデシュのメディアによって取り上げられる (15 回)</li> <li>・ワークショップ等を通じてセンターの存在を知った子どもたちが新たにセンターに通い始める (20 人)</li> </ul>